

# とらで を考古する

2002. 7. 16~9. 23



\* 展示期間中、入れ替えをおこないますので実際の展示と解説が異なる場合があります。

**旧石器時代の石器** 1万5千年以上前の氷河期では人々はハンターとして生活していた。旧石器時代の石器は狩猟道具としての石器が多い。しかし、「とりで」では縄文時代になると、これら狩猟道具は変質し、伝統的技術は失われてしまう。

**1万5千年前**

1 **ナイフ型石器** 細長い剥片の一部を加工し槍先にしたもの。2,3,4 **両面調整尖頭器** 剥片の縁辺および表裏全体に剥離調整を施し薄い柳葉状に仕上げた槍先。

**1万2千年前**

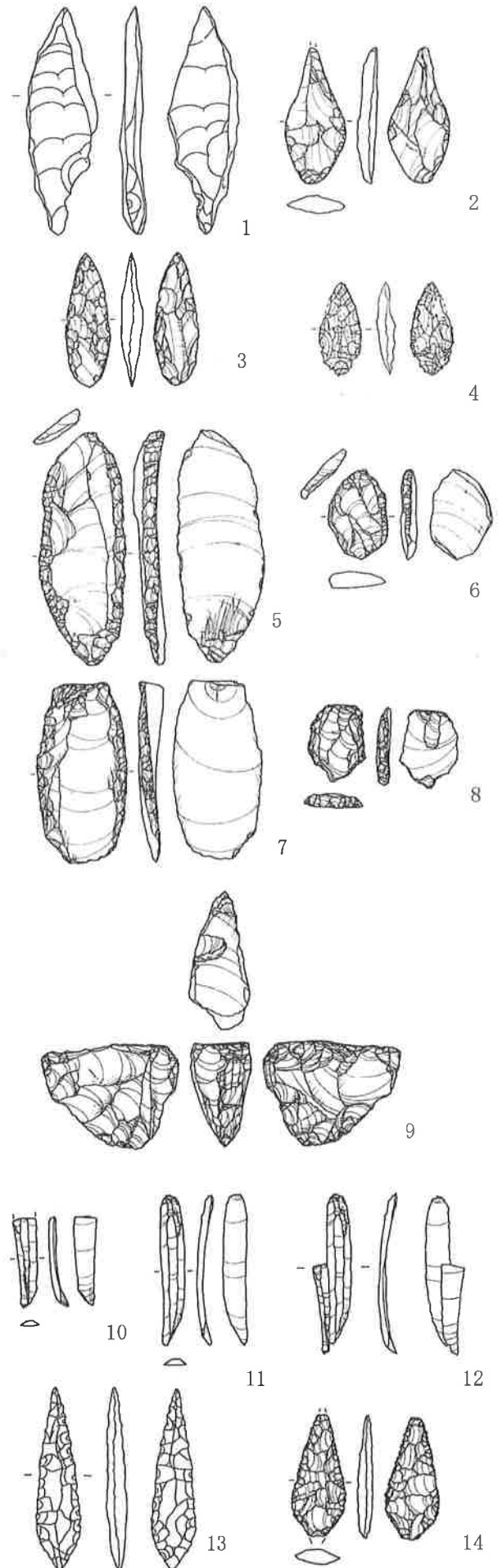
9~12 **細石刃と細石刃石核** 細石刃石核は細石刃を作り出す母岩。剥離調整技術を応用して石核の一端から連続して細石刃を作る。5,6 **彫器**は軸部に細石刃を埋め込むための溝を彫るのに使われた。7 **削器**や8 **搔器**も軸部加工に使われた。

**1万年前**

13,14 **鋸歯縁尖頭器** 隆起線紋土器にともなう縄文時代草創期の有舌尖頭器、刃部を鋸歯状に加工し殺傷力を高めた。**縄文時代の石器** 縄文時代は磨製石器を主とする新石器時代である。環境の温暖化にともない森林が形成されると森に暮らす人々となり、さらに開拓者へと成長した。石器は打製から磨製へ変化するばかりではなく弓矢の登場や尖頭器の消滅など組成が変化する。

**早期 8千年前（大渡遺跡）**

16,17 **片面打製石斧** 礫の片面だけを打ち欠き、長軸の一端に厚い刃部をつくる。いっぽうの片面は自然面を大きく残す。磨製球状石器 磨石と混同されるが、ほぼ球状に全面を磨いたもの。石弾として狩猟に用いられた。縄文時代各期に存在した。15 **石皿** 大きく扁平な石を、中央をくぼように加工して、皿状にして木の実などを砕いた。18 **砥石** 磨製石器がつくられるようになると石器を磨く砥石は必需品となった。19 **磨石・たたき石** この2つは多くは複合石器としてひとつになっている。円形のものが多いが方形のものもある。扁平に全面を磨いており中央にくぼみがあるのが特徴で周縁に敲打痕がある。**焼けた礫** これらは大渡遺跡の集石遺構の一部である。焼けた痕跡や、タールや煤などの付着物のみられる礫である。特に道具と





して加工されもしくは使用された痕跡はみられない。調理に利用したと思われる。

**前期～中期 7千年～5千年前 (西方貝塚)**

**搬入された石材** 取手の台地に自然の状態では石材が存在しない。だから遺跡から出土した石材はすべて利用することを目的として搬入された。ここでは黒曜石を取り上げたが、とくに縄文時代中期には石材の種類が豊富になり遠隔地からも石材が搬入されていたことがわかる。

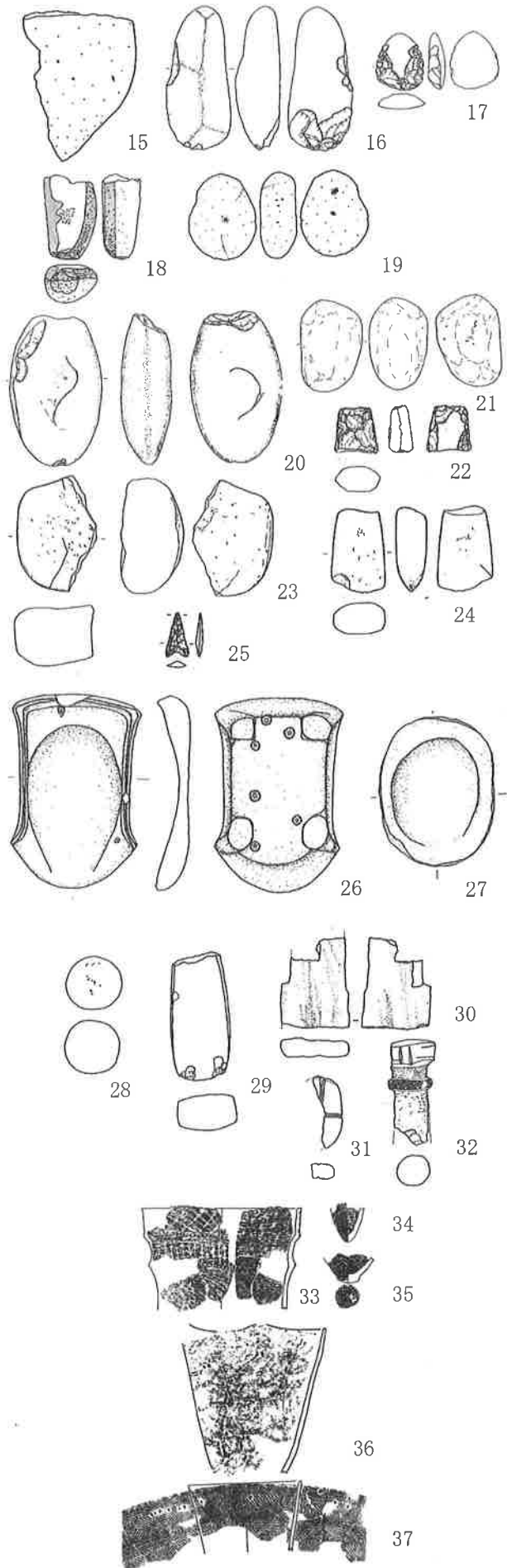
**25 石鏃** 取手市内の遺跡で旧石器時代の剥離技法を縄文時代まで伝えたのは石鏃だけである。ほとんどの石器が磨製となるなかで石鏃など一部の石器のみ剥離技法によってつくられる。**石皿断片** 縄文時代中期から後期にかけて石皿の出土は多くなる。**23 磨痕のある台石** 台石は四角く平らな形状で大きな厚い石材が使われている。さらに安定性のため重量のあるものが選ばれる。この遺物はよく使い込まれたため中央がややくぼんでおり、さらに煤状の炭化物が付着している。おそらく使用中に大きく割れたため放棄されたもの。**21 磨痕のある礫** やや大型の自然礫であるが周囲に磨り痕がみられる。こうしたわずかな痕跡も礫材の使用方法を暗示している。**24 磨製石斧とその22 未製品** 磨製石斧は木を伐採したり加工したりするための道具である。したがって磨製石斧の増加は森林開発の拡大を意味している。磨製石斧は全体を敲打によって形を整えたのちに磨くが、これはその途中で折れたため破棄されたのであろう。**20 磨石・たたき石** 砂岩の大型長円形の扁平な磨石、中央にくぼみをもつ。

**後期～晩期 4千年前～3千年前**

(西光寺前遺跡) 縄文時代後晩期になると石器の種類は一段と増加する。機能によってさまざまに分化するのである。

**石皿断片** 前段階と同じようであるが一部の破片に周縁を丁寧に加工したものがみられる。**打製石斧** 打製石斧は機能分化を果たして、土を掘る道具へと変化した。**ヘラ状石器** 押圧のための道具、石器の機能分化の例。**磨製石斧** 大形の磨製石斧は撥型で断面が長円形である。一方は小形で断面が長方形を呈する。**石棒** やや大形の石棒の先端部、やわらかな石材を加工している。後晩期の石棒は、数は増加するが一般につくりは簡単になる。

**砥石、磨痕のある礫、磨製球状石器**



(中妻貝塚)

横型石匙と石鏃 匙と書くが実際はナイフ。柄が長軸に対して直角につく横型とまっすぐな縦型がある。ガラス質の石材を利用し、石鏃と同様、剥離技法によって作られている。

26 整形加工された石皿 後期から晩期にかけて石皿のなかでも縁を周囲に丁寧めぐらせた加工の丁寧な作品が現れる。もともと石皿の石材は近くのものではないので、石皿は完成品が搬入されたものと考えられるが、さらに丁寧に加工するという付加価値を加えている点は、たんに必要な機能にとどまらない交易の発展が背景にあるのであろう。

30 砥石、29 磨製石斧とその未製品

短冊形打製石斧、分銅形打製石斧、板状打製石斧、板状石器 打製石斧は土掘りの道具としてさまざまな形に分化した。短冊形は穴を掘る。分銅形は土を掘り起こす。板状のものはやわらかい土を耕すようにもちいた。

28 磨製球状石器、有孔軽石、31 切り込み石錘 これらは狩猟、漁労関係の道具といえる。とくに漁労関連の道具は縄文時代にはいって発達したものである。

32 装飾加工石剣頭部、石剣断片 晩期に多く見られる石器に石剣がある。頭部に刻みなどの丁寧な装飾を施す例もある。これらが実用品であるかどうか疑問であるが本来は木製品であったのではないかと思われる。装飾された棍棒をシンボル化して石製となったのではないか。

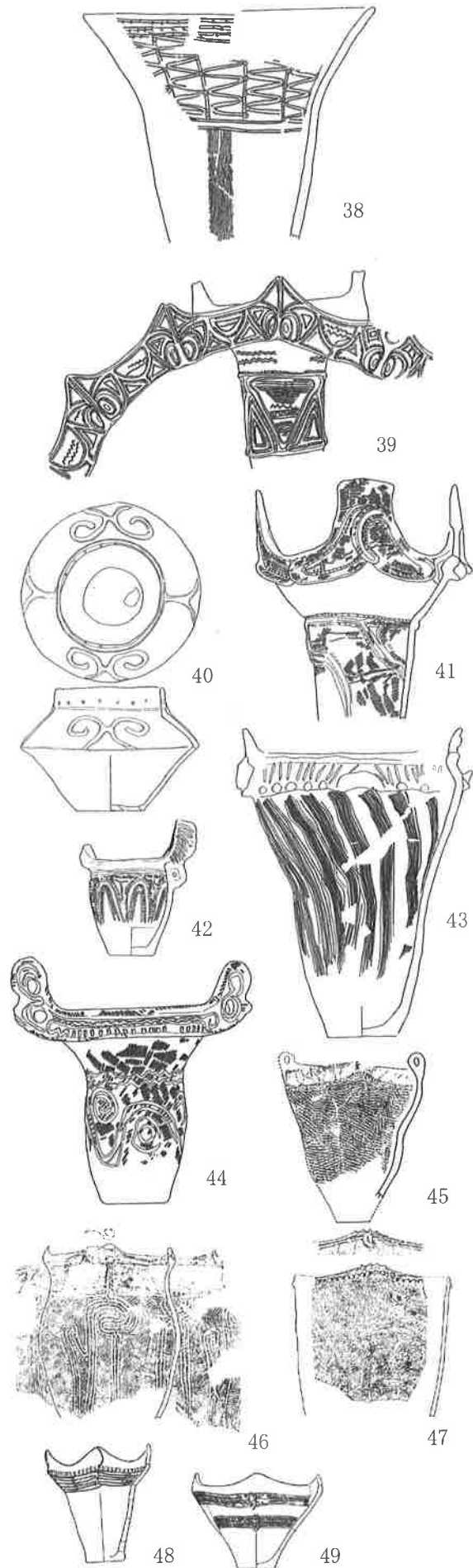
石棒未製品

縄文時代の土器

縄文式土器の発展は、草創期から前期中ごろまでが比較的、単純な製作で、表面的な装飾にとどまっていた。前期後半から機種の増加と多様性がみられるようになり、器体の製作も複雑化し、装飾は土器全体を立体的に表現するものとなっていった。後期から晩期の土器は中期にみられた過剰なまでの装飾的な指向を抑え、機種の多様性は保ちながら単純化した器体に平面的に文様を描くようになるのである。

早期 8千年前 早期の土器は丸底から尖底に変化する。沈線紋土器尖底部と34 貝殻条痕文土器尖底部を比較してみると沈線紋土器は断面が中実なのに条痕紋土器は器壁全体が同じ厚みで中空である。おなじ貝殻条痕文土器でも35 半球状底部を呈するものもある。

33,36 貝殻条痕文土器 貝殻の腹縁で土器の表面を整形して条痕を施した。33のように上半部に文様を施す例も多い。



前期 7千年前

37 多条縄紋織維土器 38 竹管紋織維土器

中期 5千年前

39 把手付波状口縁三角区画紋深鉢  
 41 扇状把手付隆線紋深鉢 40 有孔口縁双曲線紋浅鉢  
 43 多条櫛目紋深鉢 42 単把手付三角紋小型甕  
 44 環状把手付裝飾口縁深鉢 43 環状把手付微隆起紋深鉢

後期 4千年前

46 沈線紋深鉢 47 紐線付深鉢  
 52 紐線付格子紋深鉢 48 波状口縁平行線紋小形深鉢  
 49 波状口縁平行線紋浅鉢 50 対弧紋深鉢  
 51 波状口縁連弧紋浅鉢 55 刺突渦紋注口土器  
 54 多条沈線区画紋注口土器 53 四角形底部浅鉢

晩期 3千年前

56 横長瘤付区画紋注口土器  
 58 瘤付対弧紋深鉢形注口土器 57 紐線付条線文深鉢

弥生時代 2500年前 縄文文化の伝統を残しつつも稲作と鉄器の導入で石器時代は終焉する。

59,60,61 縄紋付長頸壺 北関東の弥生式土器の特徴は縄紋式土器の伝統的を最後まで持ちつづけた点にある。

62 刺突文付紡錘車 弥生時代に特徴的な土製品である。糸をつむぐ時に巻きつける軸のはずみ車である。縄文時代にみられないから弥生時代になってから布の生産活動が増加したことを示す。表は中心から外側に櫛目紋、裏に円形の刺突紋を施紋。

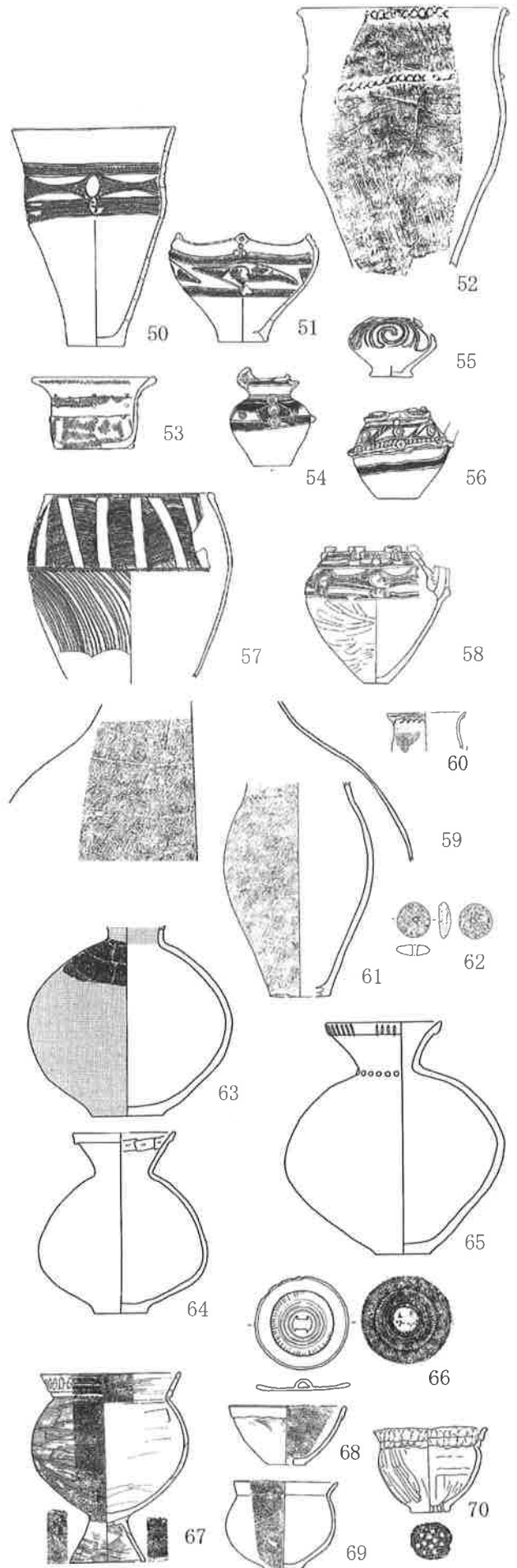
239年 卑弥呼は中国魏に使者を送った。

古墳時代 1700年前 大規模な集落の造営がおこなわれ、これを統治する首長が現れる。

63 網目状撚糸紋付壺 肩部に網目状の撚糸紋を施し赤彩した土器である。65 浮文付壺 口縁部に縦長、頸部に円形の浮文をつけている。64 二重口縁壺 口縁に粘土帯をめぐらし二重になっている。これら3つの土器は同じ住居跡から出土したもので同じ古墳時代初期の土器であるが南関東の弥生式土器の伝統から作られたものである。

66 重圏文鏡、鉄鏃、鎌断片 古墳時代には金属器が一般化する。金属も金や銀は装飾品、青銅は鏡など特殊な祭祀用具にもちいられ、鉄器は実際の武具や農工具などに使われた。縄文時代に磨製石器を磨いた砥石は鉄器を研くものへと変化した。

67 台付甕、68 埴、69 鉢、70 鉢形甕 これらは古墳時代



初期の日常的な土器の組み合わせの一部である。台付甕は煮沸用、甕は鉢や甕と組み合わせて米を蒸すのに使われた。  
**平瓶** 糠塚3号墳周溝から出土した須恵器。上半部全体に自然釉がかかっている。6世紀末。この頃はまだ須恵器が貴重品であった。須恵器は生産地に近いところでは比較的早く一般化するが生産地から離れた場所ではまだ貴重な存在だった。  
**赤彩埴** 古墳時代中ごろ、通常使用される土師器に赤彩して、ほかの器と差別化する例がみられるようになる。この土器はあるいは銅椀を模したのものかもしれない。

694年 藤原京遷都

710年 平城京遷都

奈良時代 8世紀

須恵器が普及し、使用が一般的になる。71 **大甕**、72 **壺**、**蓋**、**坏** 西日本に比べれば須恵器の普及はかなり遅れる。これは東日本での須恵器生産が寺院の建設による瓦生産などの機会を必要としたためである。

794年 平安京遷都

平安時代 9世紀

73~78,80,81 **墨書土器** 墨書土器は墨で文字の書かれた土師器で、平安時代の坏に多い。文字は1字あるいは2字が多い。地名を示すと思われる、現在の小字ほどの単位と思われる。地名が意識されるようになった背景には土地を基本とした行政支配が一般化したためである。

79 **瑞花双鳳五花鏡**と81 **刀子** 下高井向原遺跡の土坑から10世紀ころと思われる和鏡(面径11.4cm)と刀子(長さ28.4cm)が出土。周囲に同時期の遺構はないことから墓であると思われる。

935年 平将門、承平の乱をおこす

1192年 鎌倉幕府の成立

中世 13世紀

**金銅製密教法具** 井野の昌松寺に伝わる鎌倉時代の密教法具。独鈷杵(長21.4cm)、三鈷杵(長21.3cm)、五鈷杵(長21.2cm)、五鈷鈴(長22.5cm,径8.4cm)とこれらに乗せる金剛盤(径36.1cm,高6.8cm,奥行25.0cm)の完成された組み合わせである。鎌倉時代の特徴である装飾性の高く精緻な技術で作られた作品。五鈷杵、五鈷鈴に鬼目の上下の蓮弁、鈴体には金剛界四仏の種子(梵字)を表している。

1338年 室町幕府の成立

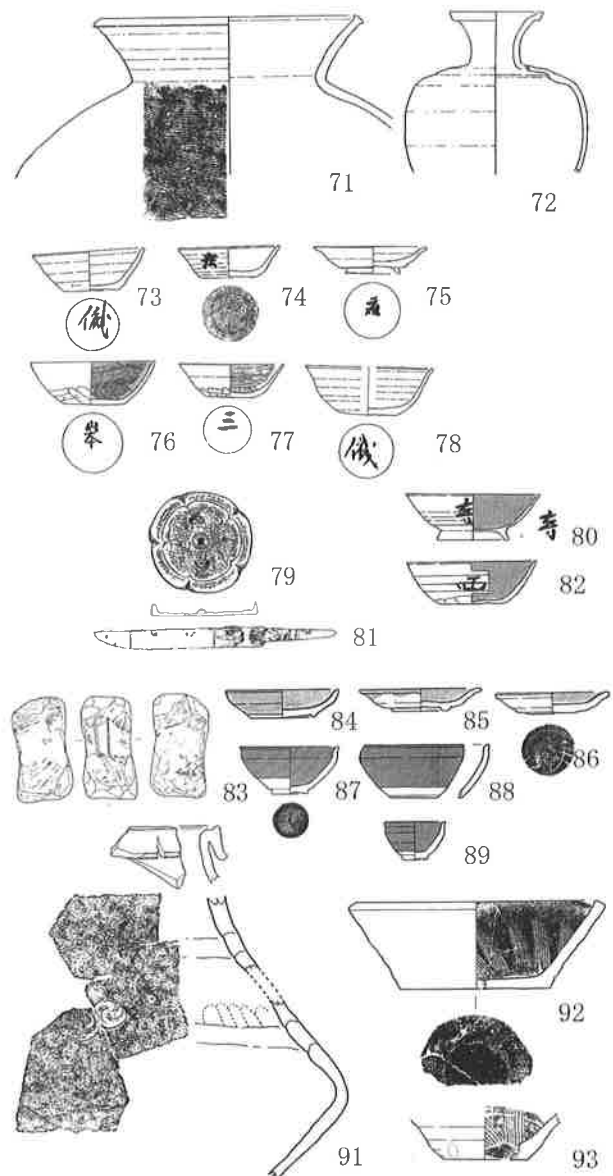
**高井城出土遺物** 中世城郭の高井城からは在地系の焼き物として内耳土器、92 すり鉢、かわらけが、また流通品と

して瀬戸・美濃系の87~89 天目茶碗、84~86 皿が、93 陶製すり鉢や91 常滑の大甕も出土している。常滑の大甕は館跡や城跡では飲料水の貯蔵のため使用されたものである。やや小形のものが下高井向原遺跡出土している。

1569年 三仏堂「永禄十二年」記載の木札

**竜禅寺三仏堂** 三仏堂は昭和60年に解体修理がおこなわれた。その際に本堂内部の来迎壁木鼻に「永禄十二年」の年号が記載された木札が発見された。また解体修理の基礎工事中に須弥壇床下の位置に建築当初と思われる土坑があり、そこから壺に入った経文断片、五穀とおもわれる炭化した植物、銭などが出土した。

三仏堂は市内に現存する建築物としてもっとも古く考古学的遺構と歴史を結ぶものである。



### 今回展示遺物を出土した主な遺跡

**西方貝塚** 標高24～22mの四方から谷津に囲まれた小文間台地にある。地点貝塚を伴う縄文時代早期から中期の集落跡。存続期間が長期間にわたったため、時期によって貝層を構成する貝種の変遷によって環境の変化を窺うことができる。市内の中期の集落跡として規模が大きく、特徴的な2段掘り込みの住居跡が出土した。(調査 取手市教育委員会 昭56～平成12、茨城県教育財団 平8)

**中妻貝塚** 小貝川の南岸の低地に面する標高23～22mの東西を谷津にはさまれた小文間台地上にある。貝塚の全体規模は、直径約150m、厚さ1～2mのヤマトシジミの貝層からなる汽水系の環状貝塚。縄文製塩、貝玉製作、集団埋葬などの縄文時代後期から晩期にかけての活動や文化をしめす基準となる重要な遺跡である。(調査 取手市教育委員会 昭和47～平10)

**北中原遺跡** 小貝川南岸の低地に面する標高22mの井野台台地上。縄文時代早期、後期、古墳時代中期、奈良時代の集落跡。(調査 取手市教育委員会 昭62)

**駒場2遺跡** 小貝川の谷津に面する標高23mの駒場台地上。浅い谷の斜面地の包含層から縄文時代前期土器片が出土した。(調査 取手市教育委員会 平12)

**大山遺跡** 相野谷川に面した標高20mの野々井台地の北側斜面にかけて古墳時代前期の大規模集落が発掘された。住居内から重圏文鏡が出土した。表採でナイフ型石器が出土している。(調査 茨城県教育財団 平8、12)

**東原遺跡** 相野谷川に面した標高22～23mの野々井台地上。弥生時代住居跡2軒、中世地下式墳2基、時期不明の住居跡、土坑、溝などが検出。旧石器時代や縄文時代草創期の尖頭器も出土。(調査 茨城県教育財団 平8、10)

**下高井向原遺跡** 相野谷川に面した標高22mの下高井台地上。縄文および古墳時代の住居跡が検出された。さらに単独で発見された平安時代の土坑から鏡と刀子を出土しており墓とみられる。(調査 茨城県教育財団 平5、6)

**甚五郎崎遺跡** 相野谷川に面した標高22mの下高井台地上。縄文時代早期、前期、平安時代の集落跡。掘立柱建物跡のほか中・近世の地下式墳など発掘された。平安時代の墨書土器が注目された。(調査 茨城県教育財団 平6)

**下高井城跡** 小貝川南岸低地に面した標高21～23mの下高井台地上。台地の北西部4分の1が土塁に囲まれ、東側と南側は堀によって台地と区切られている。西側・北側は崖面

である。発掘調査の結果、台地全体が城館の機能をもっており、幾度が大規模な造成をしている。(調査 取手市教育委員会 昭58～平12)

**神明遺跡** 標高20～21mの上高井台地の中央にあり、まわりを小貝川の沖積南岸低地から深く入り込んだ谷津に囲まれている。縄文時代中期から後・晩期の遺跡で地点貝塚をともしなう。晩期の地点では製塩土器を出土している。縄文時代中期から晩期に至る長期間継続した集落跡。

(調査 取手市教育委員会 昭和50～平12)

**上高井糠塚古墳群** 小貝川の沖積低地から大きく入り込んだ谷津の奥に面する標高22mの上高井台地の西側縁辺に位置する。前方後円墳1基と円墳2基が確認されている。6世紀後半の築造、3号墳周溝から平瓶が出土した。

(調査 取手市教育委員会 平10)

**姫宮神社遺跡** 小貝川に面した標高18mの市之代台地の中央にある。縄文時代後晚期土器片を多数出土したが、包含層以外の遺構は検出していない。ほぼ完形の加曾利B式注口土器が出土。(調査 取手市教育委員会 平6)

**大渡遺跡** 利根川から入り込んだ谷津が台地をとりかこんでいる。この谷津に面した標高23mの野々井台地上。広範囲にわたる縄文時代早期および古墳時代前期の大規模集落跡。(調査 取手市教育委員会 昭55～平13)

**新屋敷遺跡** 利根川に面する標高22～21mの平坦な米ノ井の台地上。これまで縄文時代前期住居跡、中期住居跡、平安時代住居跡、溝を調査した。

(調査 取手市教育委員会 平6～9)

**西光寺前遺跡** 利根川の谷津奥に面する標高22mの野々井台地上。浅い谷に面して縄文時代後期の包含層があり多量の遺物を出土した。遺構は炉跡、土坑などがみられた。

(調査 取手市教育委員会昭和60、平11、13)

**柏原遺跡** 相野谷川の谷津の南側にある標高22～20mの野々井台地上。旧石器時代石器集中地点5ヶ所から細石刃、細石刃核、彫器、搔器、削器、尖頭器などが出土した。ほかに縄文、弥生、奈良各時代の住居跡が検出された。

(調査 茨城県教育財団 平8)

**龍禅寺三仏堂(米ノ井)** 三仏堂は市内に現存するもっとも古い建築物で建立年代は室町時代末期に遡る。解体修理中に来迎壁木鼻に打ちつけられた永禄12年の年号の木札が発見された。



取手市埋蔵文化財センター第7回企画展

# とりでを考古する

平成14年7月16日～9月23日



このパンフレットは平成14年7月16日から9月23日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第7回企画展「とりでを考古する」にともない発行されたものです。この企画展の企画とパンフレットの執・編集は、職員の宮内良隆が担当し、その他職員の協力を得ました。

今回の展示についてご協力いただいた茨城県教育財団、ひたちなか市教育委員会、竜禅寺、昌松寺のみなさまに深く感謝申し上げます。